

はじめに

江戸時代、庶民の旅文化の発達とともに、道中記という記録史料が成立した。当時、大規模な旅の大半は伊勢参宮とそこから派生する上方の寺社参詣であり、道中記も伊勢神宮への道とそれに付随する道の記述が中心である。娯楽を目的とした旅が容認されない時代であり、加えて諸国を巡回する伊勢神宮御師の活動が、伊勢神宮への、「信仰」を掲げた旅に駆り立てた。旅人の出身地がどこであれ、伊勢周辺の街道沿いの記述は共通して見られる訳であるが、著した旅人の元に残るため、基本的に伊勢の地では馴染みの深い史料ではない。

さて、2004年7月に熊野古道が「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界遺産に登録され、これを契機に三重県では、全国でも稀な「道」自体をテーマにした文化施設、県立熊野古道センターを設立した。私はこの構想に関与するなかで、熊野古道センターの情報発信機能の柱として全国に所在する道中記を調査・収集することを提案し、同センターと共同してこれまでに熊野街道を経由した道中日記230点を収集した(1)。江戸時代の熊野街道は、伊勢参宮後に熊野を経て西国三十三所巡礼に赴く道として用いられたが、これを通らずに大和国を越えて上方に到る道中日記や、また書店が刊行した道中案内記なども、多数を集めている。

参詣の中核・結節点である伊勢・熊野の地について、多数の道中記を用いて何を明らかにすることができようか。道中記については、これまで主に歴史地理学の立場から、旅のルートをめぐる研究(2)や、民俗学・交通史の立場から、旅の習俗やシステムに関する研究がなされてきた(3)。紀行文のひとつとして紹介されることもあり、女性の旅日記に注目した研究も行われている(4)。また、関東や東北、東海道沿いの博物館を中心に、旅をテーマにした展示がしばしば企画され、封建的収奪にあえぐ農民たちの、余暇・娯楽という領域での活動を示す数少ない史料として、多くの道中記が紹介されてきた(5)。江戸時代の庶民が長期間の旅に出ていたという驚きが、こうした企画の基盤にあるだろう。

これらの分析は、主に遠隔地から伊勢や上方を訪れ、道中日記を著した旅人に焦点が当てられたものであった。また、個別の道中日記の叙述内容という直接的な情報に関心が寄せられ、様々なテキストがどのような動機や経緯で作成され、種々の道中記資料の間にある関係があるのかという点の検討は、十分なされてはいない。

個々の道中日記は必ずしも情報量の豊富な史料ではない。しかしこれらのテキストを多数集め、構造的に解読し、そして視点を旅人自身から旅人を迎える地域社会へと移すことにより、参詣街道を有する地域の研究史料として、新たな活用が可能であると考え(6)。関係史料の調査・収集、そして分析はまだ中途であるが、ここで道中記というテキストの特質を整理し、その活用に向けた見通しについて中間報告を行っておきたい。

後述するように、道中記と呼ばれる史料には、旅人が実際に著したものと、書店などが刊行・販売し、旅の便宜に供されたものがある。道中記に関する文献においても、両者

が混同されていることが少なくない。ここでは前者を道中日記、後者を道中案内記と区別して表記し、両者を合わせて道中記と呼ぶことにする。そして全国各地を出発点としながら、共通して表記される地域、特に伊勢参宮街道と熊野街道に焦点を当てつつ、上記のことを検討する。

一、テキストとしての道中日記

1、記載項目と作成目的

既に再三指摘されていることであるが、道中日記の多くは記載項目が限られ、極めて単調である。日付、地名、距離、支出金額が基本要素であり、これに川渡しや峻しい山越えの難所や神社仏閣・名所旧跡の所在が記される程度の、多分に形式化した叙述に留まることが多い。旅中の感想や和歌詠草を書き留めるようなものは珍しく、逆に地名や距離も記さず、ほとんど金銭出納記録に等しい形を取るものもある。

これは当時の識字・表現能力にも規定されている。紀行文と呼ぶに足る文芸作品の性格を持つ旅日記は、いわゆる「読み書きそろばん」の教育を受ける程度では容易に執筆し得ることではなく、特別な教養を必要とする。記載項目が限られる一方で、対象となる地域は出発地から参詣地、そして帰国するまで、同じ形式で記されるのを原則としている(7)。

こうした特質は、道中日記の作成目的に関わっている。道中日記は近代以降の旅行記等とは性格が異なり、個人的な意志のみで作成されたのではない。多額の費用を必要とする長期間の旅をするために伊勢講などの講組織が村社会で結成され、その代表者が毎年交代で参詣の旅に出ていた。通常の道中日記は、自分の楽しみや文化的な自己表現を目指したものなどではなく、支出記録を中心に講中への報告と、次に旅に赴く者への情報提供という目的から作成されたものである。ゆえに直接見聞したことのみではなく、知識として得た参考情報が書き写される。文人らの紀行文や近代以降の私的な旅行記などとは一線を画すべき史料であり、同じ旅の記録とはいえ、同様に扱っては理解を誤ってしまう。そして、多数の道中日記及び道中案内記等関連史料を付き合わせることによって、広く共有された情報に基づく記述と、旅人自身の個性的記述との区別が可能になる。

2、旅の目的地

現在伝えられる庶民の道中日記の大半は伊勢参宮を旅の中心とするものであるが、参宮後にそのまま国元へ戻ること(往復型)はまれで、多くは大和を越えて京都・大坂を巡覧するか、あるいは熊野街道を経由して西国三十三所巡礼に赴いている。その途次、讃岐・金比羅社へ、更には厳島神社、岩国錦帯橋、壇ノ浦、出雲大社などに足を延ばすこともあった。小野寺淳氏によれば、19世紀以降には、熊野越えと大和越えの違いに関わらず金比羅参詣に赴くことが一般化した(8)。

伊勢神宮に到る以前にも通常は秋葉山や津島大社などを参詣し(9)、帰路に善光寺や日光東照宮に立ち寄る記録も数多い。唯一の目的地を目指し往復する旅とは異なり、周遊型の行程を取るのが日本の、特に江戸時代における参詣の特質であった。

伊勢参宮後に大和を越えて上方に至り、所々の寺社や名所を巡る一般的な旅に対し、あ

えて峻しい熊野街道を經由して西国三十三所巡礼に赴く者は、旅の目的がより明確であると言えるかもしれない。だが彼らとて三十三所の観音のみをひたすら専心している訳ではなく、また大和越えの旅人も街道沿いにある札所寺院の観音を詣でもいる。信仰面では決定的な差はなく、西国三十三所の観音寺院を全て廻ることを意識するか、それを諦め畿内の主要寺院を廻ることに限定するかの違いである(10)。神社と寺院の違いも、あまり意識されてはいない。西国三十三所巡礼の旅の途中でも、道沿いの著名な神社に参拝することに躊躇は見られない。

ただし西国三十三所巡礼を目指して熊野街道に行く場合は、巡礼装束を身に纏い、仏道としての姿形を取った。道中日記には、伊勢参宮後田丸の地に至るまでに笈摺を購入して着替え、菅笠を被り、また終着点の第三十三番札所・谷汲山華嚴寺で笈摺を納めている記録が見える(11)。衣服のみでなく食事の面でも特徴があった。谷汲山華嚴寺本堂の柱にある「精進落とし」の(当時は木製の)鯉に触れ(12)、また紀州の入口の長島辺で、「精進固め」をするとの記述も見られ(13)、一部には熊野街道を行くなかで魚を食せず、精進を徹底した巡礼も居た(14)。

ただし、西国巡礼の間に精進の意識を強く持った者たちも、伊勢の地では伊勢神宮の御師から豪勢な魚料理を振る舞われている。旅全体がひとつの目的・信仰で統一されていたのではなく、伊勢参宮までとそこから谷汲山華嚴寺までの旅(西国巡礼の旅)、さらに帰路で善光寺や日光東照宮を目指す旅など、要所で旅の性格の転換が図られるのである。

もっとも熊野街道の途次でも魚を食している旅人は少なくない(15)。むしろ建前通りに精進をした巡礼は、特別な存在であったろう。そして大和越えはもちろん熊野街道越えの旅人たちも、ほとんどの者は大坂で数日間滞在し、案内人を雇って市中見物や芝居、見せ物小屋見物を楽しんだ(16)。意識面で多少の違いがあるにせよ、道中日記を著す旅人たちにとって、物見遊山、遊覧の旅の要素はやはり濃厚であった(17)。

周遊型の行程をとり多数の寺社を巡る旅で、主な参詣先としては伊勢神宮、西国三十三所、熊野三山、金比羅社、京都・大坂・奈良の寺社、そして善光寺、日光東照宮などがあげられる。これらのうちで、旅人たち自身はどこを主な目的地と認識していたのであろうか。ひとつの表現として道中日記の表題に注目し、目的地別に分類してみよう。熊野街道を辿る道中記で現在確認できた230点のうち、目的地を表題に含むのは124点である(残りは単に「道中日記」などと目的地が特定されない52点と、表題自体がない54点である)。

まず「参宮道中記」など伊勢参宮のみを掲げる「参宮型」が39点、「伊勢」や「参宮」の語は用いられず、「西国道中記」などと西国三十三所巡礼を掲げる「西国型」が50点、「伊勢西国道中記」などと、伊勢参宮に西国巡礼(や熊野)などの「複合型」が34点、そして讃岐金比羅社参詣を掲げるものが1点ある。

複合型34点のなかでは、伊勢参宮に「西国」の語が付されるものが25例であるのに対して、「熊野」が出るのは7例に留まる。なお、「熊野道中記」のような「熊野」が単独で表記される庶民の道中日記はない。江戸時代においては熊野三山は、伊勢参宮後に、そして西国三十三所巡りと結びついて訪れる地であったことの表れである。

これを道中日記作者の出身地域別に分類すると、顕著な傾向が表れる。東北地方(陸奥国・出羽国)では、参宮型24、西国型6、複合型9(うち1は参宮+金比羅)で参宮型が最も多いが、関東地方(上野国・下野国・常陸国・上総国・下総国・武蔵国・相模国・

甲斐国)では参宮型 14、西国型 19、複合型 19 と、西国型の方が多数を占める。そして両地方以外の、中部東海、畿内、中国、四国、九州地方では、参宮型はわずか 1 例、対して西国型は 25 例、複合型が 6 例となっている。時期的な変化はあまり見られないが、金比羅参詣を表題に含むものは 11 例で、1 例を除き 19 世紀以降である。

東北地方で見られる西国型は、陸奥国でも白河郡、田沼郡など南部に位置し(いずれも現在の福島県域)、陸奥国北部や出羽国では何より伊勢参宮が、意識の中心にあった。一方、東海・畿内を中心に伊勢神宮が身近な地域では、伊勢参宮のみでは道中日記を著す動機にはならなかったのであろう。今後収集が進めば、地域をさらに細分した分析により、傾向を明確に示すことができるものと思われる。

なお、伊勢参宮や西国三十三所巡礼を標榜しつつ、他の目的を持った旅もあった。通常、長期にわたる旅は冬から早春に掛けての農閑期に行われる。だが、関東・東北地方から、農繁期の、それも 6 月後半という気候の最も過酷な時期に熊野街道の険しい山道を越えていく旅人たちが少なからず居た。6 月 20 日前後に熊野街道沿いの尾鷲で宿を取った事例が、230 点の道中日記のうちで 18 点ある。

この事実は在地の史料からも確認できる。尾鷲組の大庄屋は、代官が交代した時などに組内の状況を「在々模様書」という文書で報告していたが、そのなかで巡礼の多寡について、「例年六月十八、九日頃より廿四、五日迄之内、関東筋西国順礼ニ旅人よほと通り候ニ付」(18) などとある。別の時の報告では、6 月中の巡礼数の少なさが旅籠屋らの困窮理由として上申されるほどであった。

この極めて特定された時期に訪れる旅人は、何を目的としていたのか。武蔵国南埼玉郡蒲生村では、天保 7(1836)年と推定される年に村内の参詣に関する取り決めをしている。そこには、早春の参詣とは別に「関東筋百姓之倅共西国三拾三所観音順礼として年齢十五、六才と二拾四、五才之もの」らが集団で毎年 6 月 1 日前後に出発することが問題とされる。農繁期に貴重な労働力が村を出ていくことの影響はもちろん、特定の日に旅人が集中するために宿に泊まれず野宿をしたり、酷暑のなかを熊野街道の「大難所」を越えることを余儀なくされるため、屈強の若者でも病気になることが多い、と憂えている(19)。

彼らがわざわざこの時期に旅立つ理由は、伊勢参宮や西国三十三所巡りを行いつつも「後生信心」などではなく「七月十六日は是非々 内裏拝見仕候日割二而各道中仕」のだという。確かに道中日記中の京都滞在中の記事には、御所を見学しているものが少なくない。白川家が対応を担当していたようだが、見物客は通常 36 文を払い、土器(かわらけ)での御神酒や節分の大豆を頂戴し、雷除けのお守りを授かってもある。御所の内侍所や紫宸殿まで見物しており、江戸時代における朝廷と民衆との「交流」の事例として興味深い(20)。

御所では盆行事として燈籠が飾られ、一般に公開していたが、道中日記では他の時期でも内侍所などの見物をしている記事は珍しくない。また 6 月 20 日前後に熊野古道を辿った旅人たちが、7 月 16 日に京都で御所を必ず訪れた訳でもない(21)。この日には金閣寺や御室御所で開帳があり、現在にまで続く大文字の送り火も行われ、これを四条河原で見物した旅人の記録もある(22)。

蒲生村の申合わせでは、この時期の旅の目的は御所見物だと断じるが、民衆の旅の行動と朝廷への意識とを性急に結び付けるのは危険である。だが、参宮や西国三十三所巡礼を掲げつつも、観光地の種々の年中行事に合わせた旅が存在したことは間違いない。伊勢で

正月元旦を迎えるべく訪れたと思われる旅人も居り、旅の時期と神社仏閣等の年中行事との関係は、当時の旅の目的を知る上でも重要な要素である。

3、下書と清書本

現在伝わっている道中日記は、記載形式はもちろんだが、内容も筆跡も極めて整っているものが多い。日々書き継いだ場合に起こる墨の濃淡や字の大小の違いは小さく、修正・添削の跡もほとんどない。そして、表紙には帰国後の日付が記されることもある。例えば、文政 2(1819)年 1 月 9 日に下野国那須郡を出立し、同年 4 月 1 日に帰郷した花塚兵吾がまとめた道中日記には、表紙に「卯ノ六月十日書之」と記される(23)。旅を終えてから 2 か月以上を掛けて、整理して清書したものであった。

まれに、整った記載の道中日記とは別に、同じ作者・年次で同じ旅についての日記が残存し、校正・推敲の跡や墨の濃淡・筆調の違いが見られる場合がある(24)。これは実際に旅の途中で書き継がれたものと思われ、恐らくはこうした旅中の「下書き」を元として帰国後に「正式な」清書本を作成し、下書きは破棄されるのが普通だったのであろう。これも、旅の楽しい記憶を書き留めることに目的があったのではなく、講中への報告書、次に訪れる者への参考となるものだったからである。なお清書・下書ともに、作成には後述するように道中案内記が大いに参考にされた。目的と利用のされ方において、道中日記と道中案内記には多分に共通性がある(25)。

一旦作成された道中日記が、次の旅の参考とされた明確な記録が残るものがある。川瀬雅男氏が紹介された『西国道中記』(26)は、天明 6(1786)年に 22 名で出立した陸奥国白河郡の旅人の日記に、4 年後の寛政 2(1790)年に 17 名で殆ど同じ行程を辿った旅人が加筆・追記したものであった。川瀬氏によれば、年次の異なる二種類の記載は、筆跡で容易に区別ができるという。

二、道中日記の関連史料

道中日記を理解するために、関連する諸史料について整理を試みる。なお、これは地域史史料として活用を図るためであり、旅人の国元での講や出立時の饞別に関わる史料などは、ここでは取り上げない。

1、納経帳

納経帳は、西国三十三所巡礼と四国八十八所巡礼に（それから波及した各地での札所巡りにも）不可欠の帳面で、札所の寺院にお金を納め、仏号・寺号、年月日の記入と宝印を受けるものである。本来は書写した経文（西国三十三所巡礼の場合は観音経）を納めることから、「納経帳」と言う。札所を廻る巡礼に特有のもので、伊勢参宮のみの場合や大和越えで旅を続ける場合には、基本的に納経帳は伴わない。笈摺・菅笠と共に、巡礼たることの指標となる。

訪れた寺院ごとに年月日が記されるため、道中日記と同様に、これから旅の行程を知ることができる。そして納経帳はその性格上、間違いなく実際に「旅を共にした」史料であ

り、この点で通常は帰国後に清書された道中日記とは異なる。

江戸時代の納経帳が現代のものと大きく異なるのは、札所に限定されず、様々な寺社を含む点である。まず第一番札所以前の納経印が目立つ。参宮街道沿いの白子観音（子安観音寺）、田丸から熊野街道に入ってすぐ、「手引観音」として知られる柳原千福寺、そして西国三十三所の「前札所」とされる八鬼山の日輪寺などが見られる。第一番札所以降も札所以外の名高い寺院が多く登場する。三十三所の観音巡りを建前としつつ、実際には道沿いの様々な寺社について、同様に「信仰」の対象とした様相を見て取れるのである。

驚かされるのは、「納経帳」でありながら、御師らの手による神社の印が少なからず存在することである。もちろん神仏習合の時代ではあるのだが、津島大社、熊野三山、諏訪大社、そして当時最も仏教、とりわけ西国巡礼を忌み嫌った伊勢神宮の印まで見られるのである。納経帳は、旅人の信仰の様相だけではなく、当時の寺院と神社が参詣客にどう対応したのかを考える材料にもなりうる (27)。

近年では西国三十三所巡りを目的とした納経帳に、札所ではない諸々の寺社の印が捺されることは基本的でない (28)。伊勢神宮など神社はもちろん、西国第一番札所に到る途中の寺院もほとんど現れなくなる。街道沿いの様々な寺院・神社を含む納経帳から、札所寺院のみのものへ転換していく経緯を明らかにすることにより、近世から近代にかけての神仏分離の浸透過程や寺社に関わる様々なレベルでの諸政策、あるいは交通手段の発展等による巡礼形態の変容を考えることもできるのではなかろうか。

さて、四国八十八所を巡る道中日記は、西国三十三所巡りや大和越えのものに比べて、極端に少ない。旅人の階層の違いや、基盤となる講の有無が大きな要因であろうが、それだけに四国八十八所の納経帳は、四国巡礼の実態を旅人側から見る上での数少ない手掛かりである。

なお、納経時には自分の住所・氏名、同行者、年月日、願文を記した札を納めた。現在も四国巡礼で見られる慣習である。一般的には紙札だが、本来は木札で、札所寺院の本堂などに打ち付けて参拝の印とした。札所寺院を巡ることを「札打ち」と称する所以である。寺院の天井に打ち付けられた大量の木製納札を分析した社会学者前田卓氏の研究は、よく知られている (29)。

納札は札所寺院以外の寺社や泊まった宿へ納めたり、旅人同士で交換 (30) したりしたため、出発前に版木でまとめて刷って作成されることもあった。未使用のものが道中記類と共に旅人の手元に残った事例もある (31)。

2、道中案内記

前述したように、道中日記は作者の実際の見聞のみに基づいて叙述されたのではなく、様々な参考情報を書き写した部分が多い。なかでも最も強い規定性を与えたのが、書店から刊行された道中案内記であった。道中案内記は参詣目的地ごとに編纂されることが多く、西国巡礼の道中案内記では通常は伊勢を起点として谷汲山華厳寺で終わる。

地名、距離、川渡しや難所の峠道など留意箇所、そして名所旧跡の情報が道中案内記の主な記載項目であるが、これに日付と実際に泊まった宿名、金銭支出記録を書き加えれば、道中日記の基本形となる。換言すれば、道中案内記の記載を全く参照せずに道中日記は成

立しない。もちろん旅中でも道標などから地名や距離の情報は得られよう。だが、出発地から全ての地名とその間の距離を書き留め続けるなどという作業は、道中案内記を前提としなければおよそ考えられない。

道中案内記がまず成立し、その書式に合わせて道中日記が著されるようになったことは、まず間違いない。江戸時代に入り文人の紀行文というスタイルが庶民層に浸透していったのではなく、道中案内記という出版文化が道中日記というテキストを生み出したのである。

この点は、道中日記の記載内容の史料的意味を考える上で重要である。以下に、具体的な事例を示そう。文化 3(1806)年 1 月に、武蔵国入間郡の信吉という者が尾鷲から八鬼山を越えて行った。彼はその間を次のように記している (32)。

六日雨天 山上雪難儀

一、おわしより三鬼江三り 塩屋松兵衛 木銭米代八十五文

町の出口ニ川ニツあり、橋式文、大水ニハ舟渡し、町舟つき木の本迄海上七り、新宮迄陸路廿里、此間を八鬼山越と云、上り五十丁、峠ニ八鬼山日輪寺、本尊三宝荒神、御長二尺五寸弘法大師御作、脇ニあみた観音薬師同御作、下り三拾丁難所、峠寺迄四拾九丁有、壱丁ことに石地藏有、坂を下りみきの浜江出ル、峠ニハ茶壺軒有さて、寛政 3(1791)年に京都と伊勢で販売された道中案内記、「西国順礼細見記」の記載は以下のようになっている (33)。

▲おわしよりみきへ 三り

町家なり、町の出口に△川ニツ有、大水にハ舟わたし、町舟つき木の本迄海上七里、新宮まで陸路廿里、此間を八鬼山越といふ、上り五十丁、峠に△八鬼山日輪寺、本尊三宝荒神、御長二尺五寸弘法大師御作、脇にあみた観音薬師同御作、下り卅八丁難所、峠寺迄四十九丁有、壱丁ことに石じぞう有、坂を下れハみきのはまへ出る

天候や宿名、支出した金額を除き、峠の下り道の「難所」という評価も含め、ほとんど記載は同じである。尾鷲の出口の川では、案内記にはない「橋式文」という表記があり、彼が橋を渡って川を越えたことは間違いないが、大水でもないのにわざわざ舟渡しや木本までの舟路について記すのは、舟を実際に見聞したためではない。八鬼山日輪寺仏像の詳細な情報なども含め、単に道中案内記を転写したに過ぎないのである。

安永 8(1779)年に上野国下磯部村から同行 5 名で西国巡礼に訪れた田村甚右衛門は、道中案内記類では利用を戒めている行程であるが、紀伊国に入った長島の地から二木島へ船で渡った。ところがその間の陸路で、彼らが実際には踏破していない三浦、馬瀬、古本、尾鷲、三木里、曾根の各集落、距離、川渡しや峠越えについても、わざわざ「南(難)所なり」などという表現さえ伴って、乗船前・下船後と同様の形式で道中日記に書いているのである (34)。

道中案内記を誤って転写した例も見られる。陸奥国安積郡郡山から寛政 7(1795)年に訪れた今泉伊左衛門は、尾鷲からの区間を道中日記に次のように認めた (35)。

一、おはし 壱り半

町家なり、次ニ川三つあり、大水ニハ少し川上ひんの村ニ舟はたし有、次ニまこ坂上下一り

一、見き 三り

町家なり、町の出口に川ニツ、大水ニ者舟わたし

ここで「おはし」（尾鷲）についての記述は、この前の「古本」の地のところで記すのが正しく、また「見き」（三木里）で書かれたことが、尾鷲で記すべき内容であった。結局この後、尾鷲から三木里に掛けての八鬼山越えの記事を外すことでいわば帳尻を合わせ、次の曾根、二木島からは正しい記録に「復帰」している。

先に見た川瀬雅男氏紹介の道中日記では、大坂の地で「是より道中記、京迄出ル間怠慢致候間、此度外ノ道中記より写取申候、依之道筋不委、御加筆被下度候」と他の道中記類を写し取ったことが明記されている。恐らく道中案内記を写したものであろう。いずれにせよ個人の楽しみを目的として作成された日記であれば、こうした記述はありえない。

道中日記の記述は、このように多分に道中案内記に規定され、その記述を丸ごと転写した部分も多いのである。これは剽窃などという問題ではなく、再三指摘するように、道中日記の作成目的が仲間への報告、次に旅立つ人への参考記録だったからである。道中日記の記述から旅人の実体験や感想、道沿いの様相を復元する際には、文字情報の転写と旅人固有の記述とを峻別することに留意しなければならない。

旅の制度が十分に整備されない時代に、未知の地へ赴くには何らかの「マニュアル」が不可欠ではあるが、特に道中日記を記す階層の旅には、「マニュアル」への依存度が高い。彼らは道中案内記というフィルターを通して、街道沿いの地域を見た。江戸時代の出版文化が、「マニュアル」に基づく旅を生んだのである。

道中案内記については、後述の旅籠屋の案内記や定宿帳、講帳等も含め、民間の研究者・今井金吾氏による精力的な収集と解説が知られている（36）。なお、氏は旅人が記した道中日記についてはほとんど言及せず、刊行された道中案内記類を「道中記」と総称している。

氏の仕事は、東海道など主要街道を始め全国を対象とし、道中記類を網羅的に紹介され、特に年次的変化を跡付けた貴重な成果ではある。しかしながら道中記類をその作成目的や刊行主体で分類する視点には乏しく、また旅人が著した道中日記との関係についての関心も薄い。道中案内記についてはまだ調査が不十分なため、出版物としての正確な位置づけは後日を期することとするが、当面の課題として2点を挙げておきたい。

まず道中案内記作成の経緯である。複数の道中案内記を照合すると似通った記述が少なからずあり、既版の同種刊行物を模倣していることは明らかである。だが、最初はどういうように作成されたのか、あるいは先行の刊行物との違いは、どのように情報を集めた結果なのか。つまり、どの程度現地を実見して編集しているのかが、地域史史料として活用する上で問題となる。

元禄3(1690)年の刊行という早い時期の「西国三十三所道しるへ」(37)は、美濃国多芸之郷谷氏一簞子という者の作だが、「もとより我住国美濃国ニて侍れハミつからの道の記のやうにかた腹いたきながら書連はんべる」と書き起こしている。当初はこのようにいわば「道中日記」と同様に個別に作成されたものを、書店などが編集していったのであろうか(38)。

西国巡礼についての最も情報量豊かな案内記であり、京都で版行された「西国順礼道中細見大全」(39)には、大和越えとの分岐点・田丸の地から熊野街道に入って間もなく、栃原村の入口で次のような記述がある。

次ニ栃原村入口に川有、満水ニハ渡がたし、但し右の山根を廻れば道ある様ニ見えし

ゆゑ、栃原の人に尋れども道なしといひて教ず、され共此川上ハ栃原の村中を流るゝ川なれば、川向ひの人家へ通ふ道なくてハ叶はず、猶その時に臨て尋給ふべし

実際にこの地に赴き、道沿いの住民に聞き取りをしながら著したことが分かる珍しい記述である。また、尾鷲から木本（現・熊野市）に向けて越えていく曾根次郎坂太郎坂の名称について、これは「自領他領」、即ち領境の坂という意であるとし、従来の案内記に見られた、次郎坂と太郎坂との「二つの坂」という間違っただけの理解を正す記述もある。

こうした実地情報の獲得経緯と、版元との関係に興味を持たれる。今井金吾氏が紹介された道中案内記でも、三都以外に地方の出版元や販売元が多く見られ、特に伊勢神宮門前町の宇治・山田や参宮街道沿い、参宮街道の事実上の起点となる尾張、西国巡礼の行程上に位置する紀州（粉川版）などに多いことが注目される。旅人は、国元で全行程の道中案内記を用意して旅立ったとは限らない。伊勢参宮後、西国巡礼への転換地点である田丸では、道中記（道中案内記）を販売していた（40）。こうした地方の拠点は、道中案内記を販売する機能のみではなく、地域の情報を三都に還元する役割をも果たしていたのではなかろうか。地方の出版文化との関わりで検討すべき課題であろうと思われるが、別途検討する機会を持ちたい。

3、旅籠屋作成の道中案内記

巡礼たちが旅の参考とし、道中日記の情報源として利用したものに、書店の刊行物以外に旅籠屋が作成した道中案内記があった（41）。書店発行の道中案内記に比べて簡略で、十数丁程度のものが多いが、地名、距離、注意事項等の、旅人にとって必要最低限の情報は充たしている。表紙裏や奥付等に旅籠屋の住所・名前を刷り込み、宣伝を兼ねて無料で配布したものである。

本来これらは、旅籠屋の引札（宣伝チラシ）から発展したものではないかと思われる。尾張国の津島や佐屋辺りから伊勢神宮に掛けての道沿いでは、京都・大坂の旅籠屋の手代たちが旅人に引札を配り、時に酒肴や菓子振る舞い、道中案内記を無料で提供し、荷物を預かり上方まで運送するサービスを掲げ、盛んに客引きをしていた。例えば京都六角堂前の旅籠屋、縫物屋嘉兵衛の引札には「中川原町ニ私方出見世御座候間、手代ぬい物屋六兵衛と御尋下され、京都へ送り荷物并道中記御用被仰付可被下候、以上」と記される。伊勢の入口、中川原に出店があり（出店については後述）、手代が常住し、荷物の京都への運送と道中記の無料配布、そしてそれに伴う宿泊の先行予約が行われていたのである（42）。

宿引きに辟易した旅人も多かった。栗原順庵という上野国の医師が嘉永 3（1850）年に著した道中日記には、桑名に船で渡る前の佐屋で京都の 4、5 人の旅籠屋手代が熱心に客引きをする様子を詳しく記す（43）。旅人に対し「手札」（引札）を出し、酒を勧め、京都での宿の予約を迫る。栗原順庵はよほど迷惑と感じたのか、参宮後は直ちに帰国するとか兄弟が京都に住むとか、宿引への断り方の口実を記した。京都からわざわざ出張する熱心さは理由のあることで、「此家共に着し候へば、買物すすめ、みな棒先をきり、其上妓楼すすめ、式朱拾厘の女郎を百匹位に申しなし、種々貪り方あるなり」と、高値で買い物をさせて利ザヤを稼いだり、遊女を勧めて食べるためであったという。

参宮街道沿いには、伊勢国の旅籠屋も含めて宿引きが横行し、彼らが配る引札が飛び交

っていた。引札には旅籠屋の場所と目印、そして利用を誘う口上が記されるが、大量にばらまかれる引札のなかで自分の店のものを保管させるために、旅人にとって有益な情報を記す工夫が施されていく。

楕円形で囲まれた地名と地名間の距離を記す程度のものではあるが、一枚刷りの道中絵図が生まれる。絵図の端の口上部分に記される内容は「引札」と変わらず、「引札」に略絵図が付け加わったととらえると分かり易い。また、例えば京都六角堂前の旅籠屋、餅屋惣左衛門の引札には、裏面に桑名から出店のある伊勢中川原までの略案内記が刷られている。桑名で配られたものであろう。道中略絵図や略案内記が更に発展し、書店の刊行物ほどのボリュームはないが、冊子仕立ての簡便な道中日記を作成できるようになるのである。

略絵図も道中案内記も、旅籠屋個々にではなく、複数の旅籠屋が共同で作成することがあった。「京都より道順西国順札道中美濃国谷汲寺迄金毘羅道中并二播磨名所廻りひとり案内」との表題を持つ15丁の道中案内記は、内容は全く同版であるが、表紙裏に「定宿」として記される旅籠屋名のみ異なるものが確認できる。旅籠屋としてはいずれも京都の旅籠屋である鐙屋太右衛門、伊勢屋半兵衛、筑前屋次郎左衛門、備前屋藤五郎の名が見える。同様に「伊勢より熊野路道中記」と題した4丁の案内記を、京都の旅籠屋、扇屋庄七（正七）と筑前屋次郎左衛門が共同で作成していることが確認できる。大坂の事例では、「伊勢より熊野路道中記」という一枚物の略絵図を、長町七丁目の旅籠屋、河内屋庄右衛門と河内屋四郎兵衛が共同で版行している。

略地図案内記には、旅の全行程を網羅せず部分ごとに作成していることがあった。伊勢から熊野街道を経て大坂に至るまでを略絵図で案内した「伊勢より熊野路道中記」には、西国三十三所札所としては第四番までしか含まれないが、欄外に「但し五番藤井寺より三十三番迄進道中記ハ御入宿之上にて進上仕候」と明記されている。旅人を宿に誘う、巧妙な工夫である。

4、定宿帳

地名と地名間の距離、注意事項や名所旧跡を紹介する点では道中案内記と共通するが、定宿帳の特質は、言うまでもなく場所毎に推奨する宿の名が記される点にある。

大坂玉造の商人、松屋甚四郎の手代の松屋源助が、文化元(1804)年に後の浪花講となる旅宿組合「浪花組」を編成し、加盟した旅籠屋の名を記す定宿帳を版行して、旅人の便宜を図った。ただし今井金吾氏は、信仰のための組織が講中信徒のために作成した定宿帳は浪花組の成立より5、60年遡るとしている(44)。定宿帳の前書きにも記されるように、一人旅を断る宿や、強引に宿引きをし、遊女・博打、高価な飲食、物品の購入などを勧める旅籠屋の弊害を改めるために、結成されたものである。

宿引きの悪弊を強調しており、先に見たような引札や案内記等を配布して宿泊を勧誘する旅籠屋とは一線を画すものと言えよう。だが、「悪徳」な旅籠屋がこれで淘汰された訳ではなく、また大多数の旅人が定宿帳記載の旅籠屋へと一気に移っていったのでもない。道中日記を著す旅人の宿泊は、定宿帳で勧める旅籠屋ではなく、参宮街道等で盛んに宿引きをする旅籠屋をこそ、利用していたようなのである。

関東・東北地方から西国巡礼に赴いた旅人が京都・大坂で利用した宿を、道中日記の記

載から見てみよう。実は道中日記に記される宿は、かなり限定される。まず大坂では、記載のある 99 例のうち河内屋庄右衛門が 30、河内屋四郎兵衛 10、河内屋又六 8、河内屋嘉兵衛 2 など河内屋の屋号を持つ長町七丁目の旅籠屋が合計 55 例、平野屋佐吉が 15 例、伝法屋喜兵衛が 7、中嶋屋清左衛門が 5、大和屋弥三郎が 4、以上で 86 例と全体の 9 割近くを占める。京都では 94 例中扇屋正七が 30 例、筑前屋次郎左衛門 16 例、鍔屋太左衛門 13 例、餅屋惣左衛門 11 例、備前屋藤五郎 7 例、縫物屋嘉兵衛 5 例、以上 6 軒の旅籠屋でやはり 9 割近くにのぼる (45)。

以上に出る旅籠屋のほとんどは、傾向の違いはあるものの、引札や道中案内記の版行、参宮街道沿いの客引きの形跡が認められる。一方で浪華講に名前を連ねた旅籠屋で、大坂の松屋源助、京都の松屋吉兵衛は、確認できる道中日記のなかでは、嘉永 2(1849)年に甲斐国から訪れた旅人しか利用していない (46)。

道中日記の著者たちは、経済的に一定度の余裕を持ち、非日常性ゆえの消費型の旅をする傾向にあった (47)。浪花講が主な対象とした顧客はこうした旅人ではなく、商業取引に諸国を往き来するなど、実利的な宿を求める者たちだったのではなかろうか。

浪花講定宿帳には、東海道、中山道はもちろん、奥州や北国筋など網羅的に街道沿いの宿が紹介されているのだが、熊野街道の伊勢路（田丸から熊野まで）については地名と距離のみで、宿の記載は一切ない。伊勢参宮後に西国三十三所巡礼に赴くにはここを通らざるを得ない重要性に鑑み、いささか奇異な感がある。山道峻しいこの地の旅籠屋を編成する困難さもあっただろうが、浪花講結成の目的を上記のように考えれば、納得のいくことである。

松屋源助が編成した浪花講の定宿帳以外に、大坂の平野屋佐吉が作成したもの、また江戸の須原屋茂兵衛ら三都の書店が発行した定宿帳もある。そして次項に見るように江戸時代後期以降、三都を中心とした旅宿の講の結成が進み、旅人の便宜が図られていった。

5、講帳（判取帳）

記される項目は定宿帳とほとんど変わらないが、10 数丁の薄いもので、表紙に講の名が記される帳面がある。「講中印取」「御定宿判取帳」などという表題も持つ。道中案内記や定宿帳の多くが、小横帳と分類される横長の冊子であるのに対し、講帳は横半帳の形式である。定宿帳に比べて宿屋の名前が大きく記され、かつその下に空白部分があるのが特徴である。現在把握している限りでは、地名の表記等から判断して幕末から明治初期にかけてのものが多し。全国的に網羅している訳ではなく、伊勢を起点に金毘羅まで、江戸（東京）から伊勢までなど、参詣の旅を前提にしたものである (48)。

浪花講の講帳もあるが、京都三条大橋東詰の扇屋正七、鍔屋太右衛門、伊勢屋半兵衛が刊行した一新講社、河内屋庄右衛門が講元となった三都講など、前節で見た活発に宿引きをしていた旅籠屋らによるものもある。また、伊勢国の松阪や新茶屋の旅籠屋が「内宮御師定宿」として結成した「繁栄講」など、伊勢参宮街道沿いの旅籠屋が主体となったものもあった。浪花講の理念とは別に、裕福な参詣客らを相手とする旅籠屋にも定宿制度の便利さが取り入れられ、成立したものであろう。なおこの講帳（判取帳）も、熊野街道伊勢路を含むものは今のところ確認していない。

さて、講帳には宿屋名が刷られた下の空欄に、宿屋の印が捺されていることがある。宿の利用時に印を受ける訳だが、忘れ物をした場合にこれを証拠として当の持ち主に戻すためであったという。だがそれ以外に、同じ印が他の宿屋名に重ねて捺されていることも見受けられる。時には特定の宿屋名に2つ、3つの、他の宿屋印が認められることもある。ただし、目的地に向かって当該の宿屋より先の宿屋印は捺されていない。これは、旅人がある宿屋を利用した時に、宿屋がその後の行程において紹介・推薦できる宿を示した跡ではないかと考えられる。旅人はこれを目安として、次の宿泊を決めたのであろう。

関東講の講帳には、参宮街道から初瀬街道に分かれる六軒の地で、「道中宿茶やの者共、色々すかたをかへ道つれ二なり、帳面二印有宿をあしく申立、しんせつらしく外宿を差図仕候事まいへ御座候由、皆々宿引之者二御座候間、御取あげなく御心得可被成候」と注意を喚起する記述がある。この中に「帳面二印有宿」とあるのが、宿同士で推薦して講帳に捺された印のことを指しているのではないだろうか。

内宮法楽舎を講元とする表具講の講帳には、冒頭に「御老人様二而も手札定宿附御持参之方ハ御宿仕候」とある。一人旅の宿を断る旅籠屋があったが、手札（引札）や定宿帳（「講帳」を指している）を持参すれば便宜が図られた訳である。引札は、宿引きのための宣伝チラシとして以外に、講帳と共に今後の宿を紹介する機能があったと思われる。

三、道中記の地域史料としての活用

三重県立熊野古道センターの立ち上げに際して道中記類の収集を提起したのは、それが単に外から来た旅人の記録として興味深いだけではなく、街道や道沿いの地域社会の歴史を明らかにする史料として、ひいては地域社会に残る歴史文化遺産を顧みる材料として、活用することを考えたからである。まだ試みの段階ではあるが、いくつかの事例を記すこととする（49）。

1、京都・大坂の旅籠屋たちと参宮街道

道中記類を読む時に旅人から地域社会へと視点を移すと、寺社門前や街道沿いの地域が旅人を迎えたが故の特質についての情報を得られる。旅籠屋の所在と数はその最も基礎的なものだが、参宮街道沿いでは、前章で見たように京都・大坂から伊勢へ進出した旅籠屋たちの活動を見て取ることができる。

名古屋周辺から参宮街道沿いのどの地で京都・大坂の旅籠屋が出没するのかを、現在確認できる限りの道中日記類で見ると以下の通りである。（ ）で京都・大坂の別を記し、単に「京都旅籠屋」などが出る場合は「京都」とした。屋号は〈 〉で示したが、「ひょうたんや」（瓢箪屋）は、大坂長町七丁目の河内屋庄右衛門が用いた屋号である。出店や出張所が設けてある旅籠屋は〔 〕で記した。伊勢の山田で、旅人が御師宅で旅籠屋手代らと接触している場合は、御師名を〔 〕で示した。

甚目寺：扇屋正七（京都）

津島：扇屋正七（京都）

佐屋：筑前屋（京都）、扇屋正七（京都）

追分 : 河内屋又六 (大坂)
神戸 : 扇屋 (京都)
月本 : 大和屋弥三郎 (大坂)、河内屋 (ひょうたんや) (大坂)
新茶屋 : 「京都」
六軒 : 河内屋 (ひょうたんや) (大坂)、升屋市兵衛 (大坂)、
備前屋 [出張所] (京都)
小俣 : 鍍屋多 (太) 右衛門 (京都)
中川原辺 : 扇屋正七 [出店] (京都)、縫物屋嘉兵衛 (京都)、
筑前屋次郎左衛門 [出店] (京都)
山田 : 餅屋惣左衛門 [龍太夫] (京都)、鍍屋太右衛門 [右太夫] (京都)、
扇屋正七 (京都) [三日市太夫]、(京都宿) [泉太夫]、
川端柳 : 備前屋藤五郎 (京都)

街道沿いの要所で、上方からの旅籠屋手代が多数徘徊していることが分かる。大坂の旅籠屋は、長野峠を越え大和を経て大坂に至る奈良街道との分岐点である月本と、青山峠を越え、やはり大和を経て大坂に至る初瀬街道との分岐点の六軒に集中する。京都の旅籠屋は、扇屋正七のように甚目寺、津島、佐屋、神戸等各所に人員を配置している者も居るが、扇屋を含めて宮川の「下の渡し」である中川原辺から外宮門前町の山田に多く出沒している。そして御師宅のみでなく参宮街道沿いの旅籠屋に泊まった旅人を訪れていることもあり、京都・大坂と伊勢参宮街道沿いとの間で、旅籠屋同士のネットワークが形成されていることを伺わせる。

旅籠屋は手代を派遣するのみでなく、出店を常置した。引札の文言から出店の存在が分かるものも含めて、時期的な変遷を無視して示せば、中川原には京都の扇屋正七、筑前屋次郎左衛門、縫物屋嘉兵衛、餅屋惣左衛門、そして大坂の平野屋佐吉 (関東講) の出店があり、扇屋正七は他に名古屋と佐屋にも店を構えていた。また六軒と、宮川の「上の渡し」である川端柳には備前屋藤五郎の「出張所」があった。常設の出店の有無とは別に番頭が出てきたという記述も多く、荷物の預かりや転送を請け負っていることなどから、実質的な出店はさらに多かったことであろう。京都・大坂の旅籠屋たちにとって、これから上方に向かう「消費型」の参宮客は、それほどまでに重要な顧客であった。そして参宮街道沿いの地域や伊勢神宮門前町は、諸国からの旅人のみではなく、地元の旅籠屋や御師との関わりを持ちつつ訪れ、常駐する京都や大坂の商業資本をも迎えていたことになる。中川原に宿引きが多く出沒していたことはよく知られているが、宿引きの出自、地域的分布、旅人の受け止め方などの具体的様相は、道中記史料を用いることで明らかになる。

天明 6 (1786) 年に陸奥国白河郡から同行者 22 名と西国巡礼に赴いた旅人は、伊勢の地で内宮の神官 (御師) 藤波氏に宿を取るが、ここで「京都江荷物相廻し可申存候処、備前屋藤五郎よりハ宿引不申候故、あぶみや杯参いろへと申すゝめ候へ共心得不仕、藤波へ荷物相頼、定飛脚二而差登せ申候筈」としている (50)。御師宅に京都・三条大橋東詰の鍍屋太右衛門が押し掛け荷物の運送を持ち掛けるが、彼らは京都で備前屋藤五郎の宿と決めていたためかこれを断り、荷物は定飛脚で送ったとする。備前屋では当時、旅籠としての利用以外に「木賃」として用いることもできたようで、これが彼らが鍍屋の誘いを断った理由なのだろう。備前屋は六軒と川端柳に拠点があり、荷物の運送も請け負ったようだ

が、上記のように「宿引不申」としている点、そして神宮門前の山田や中川原では活動が見られない点など、他の旅籠屋とは少し傾向が異なるように思われる。今井金吾氏が紹介するように、備前屋藤五郎は後に浪花講に加入し、明治初年には浪花講の講帳（判取帳）も発行している（51）。白河郡の者たちが泊まった時にはまだ講自体が発足していないのだが、浪花講に名を連ねた旅籠屋の特質を考える上で参考になる事実である（52）。

2、地名の変遷

道中案内記や道標などに、地名は平仮名で記されることが多い。これを元に旅人が道中日記を著す時に、地名を漢字で表記していることも少なくない。それが何らかの情報、根拠に基づくのか、自分のイメージを当て嵌めただけなのかは不明だが、誤った漢字表記が次第に広まって用いられていくこともある。

尾鷲へ入る手前、石畳が見事に敷き詰められた馬越峠は、本来は便石山と天狗倉山の間を越えるという意味で「間越峠」と表記されていた。宝暦 11(1761)年に幕府の巡見使を迎えた尾鷲組の役人らは、馬越峠の名前を巡見使に問われ、更に「文字之儀」を尋ねられた際「あいだ越」と書くとは答えている（53）。事実、地域に遺る江戸時代中の文書には、ほぼ全て「間越峠」の字が当てられる。

だが一部の旅人たちは、ひらがなの表記を見、あるいは音声で聞いた「まごし」（まごせ）について、「孫背」「孫瀬」など「孫」の字を用いた。また、馬が峠を越えていくイメージから「馬越峠」の字を当てる者も居た。「馬」の字が一度用いられると、いわば伝言ゲームのように派生して「こまや坂」「こまごせ峠」などという表記も生まれ、「馬」のイメージが高まっていく。幕末期には地域社会でも「馬越峠」と表記することが見られるようになり、最終的にこの地名で定着している。

木本（現・熊野市の中心部）近くの逢神峠は、現在は伊勢と熊野の両神が出会ったとする伝説の場のひとつとして「逢神」の字が当てられるが、狼が出没するイメージのためであろうか、「狼峠」の名称も用いられる。2つの地名の関係が従来問題とされたが、『西国三十三所名所図会』で記されるように、「逢神」は後世の付会の説である可能性が高い。神話・伝承に関心を寄せる旅人や道中案内記作者らが、特に伊勢参宮から熊野に至る道沿いで、本来は何の関係もない地名に「逢神」の字を当てたことは充分考えられよう。

だが、この峠に特に狼が多く出没したという事実は確認できず、「狼峠」が元々の表記であったことも疑わしい。道中日記には、早い時期を中心に「大亀」の表記が少なからず現れる。山の形状か、あるいは目印になりうる巨岩などによるものか原義は不明だが、「狼峠」「逢神峠」の前にこの表記があり、平仮名表記に旅人が漢字を当てることで「大亀」→「狼」→「逢神」へと揺らぎながら変遷していった状況が想定できる。

地名は結局、本来の語義よりも実際にどのように用いられるかにより定着していく。街道沿いにおいては、地域社会とは別に峠道の「利用者」である外来者の解釈と、彼ら同士の情報伝播により影響されるという面があったのではなかろうか。

3、道の多様性と特質

五街道のような整備された道とは異なり、山間地を縫う熊野街道では、経路が必ずしも

一定せず、また複数の道が併存する場所も少なくない。しかしながら熊野古道の世界遺産登録は、登録された経路が唯一絶対的な道で、他とは区別される価値を持つかのような誤解を招いた。熊野街道は確かに熊野三山へ参詣する道としても利用されたが、本来は地域間を結ぶ生活道だったのであり、参詣地を目指す一本の道ではあり得ない。

道中日記を見ていくと、現在知られている熊野古道とは違う、種々の「道」を旅人が辿っていることを確認できる。中でも川を渡る所では、様々な経路や方法が用いられた。

モータリゼーションが発達する近代以前に、多くの川に橋は架かっていなかった。橋があっても橋銭を徴収されたり、また増水すると簡単に流れてしまうこともあった。往き来る旅人や住民の多くは、少々危険を冒して徒歩で、あるいは人に担がれ、川を越えて行ったのである。だが大きな川や水かさが増した時には、舟の利用が不可欠であった。そのため多くの川の兩岸には渡し舟が備えられ、集落にはそれを操る船頭や舟を製作する船大工らが居た。

熊野街道においても、多くの川が旅人の行く手を遮っていた。西国巡礼路の代表的な道中案内記『西国順礼細見大全』を見ると、熊野街道に入った後、相鹿瀬から紀伊国に入るまでのほぼ一日行程の間でも8か所の川越えがあり、それぞれについて舟渡しの有無や増水した際の迂回路の情報が記されている。旅人によってその比重は異なるが、熊野街道のように官道ではなく地形の峻しい所では、峠道以上に川越えが、より大きな課題だったのである。

具体的な事例を見てみよう。熊野へ向かう道で馬越峠の手前には、銚子川という比較的大きな川が流れている。江戸時代には、枝分かれした川が下流に広がっていた。旅人たちの道中日記によれば、渡る経路と方法は3つあった。まず古本（現・紀北町海山区相賀）の集落から直に川に掛かり、恐らくは浅瀬を歩いて渡る方法である。川を越えた後は、馬や駕籠は通行不能の「山際の石径にて甚難所」（「南紀巡覧図」）を経て、馬越峠に掛かる。次に、川沿いを右折して少し上流に行き、対岸の鷺下の集落へ渡るルートがある。ここには、岩と岩とを渡す簡便な板橋が架かっていたようだ。3つ目に、さらに上流の便ノ山の集落にまで至り、舟渡しを利用するものである。

「尾鷲組大庄屋文書」などを見ると、紀州藩の役人や幕府の巡見使などが通る公的な道は、最後の便ノ山から舟で渡るものであった。馬や駕籠の通らない道では、役人たちは通行できない。だが旅人たちは、川が増水しない限り、浅瀬や板橋を渡り馬越峠に至る。ただし鷺下に至る道の橋は簡単に流れてしまう不安定なもので、常に用いられた訳ではない。

官道ではない街道では、架橋や舟渡しは兩岸の村々の働きに委ねられ、料金も住民らによって定められた。天明3(1783)年の道中日記(54)によれば、熊野川の渡し船について「船ちん弍十五文宛、順礼者斗り、常通り之者ハ五文宛ノよし」と、巡礼者（旅人）からは通常の5倍の渡し賃を取っていたことを知る。熊野川のような厳重な管理が敷かれていた大川でも許されたのであれば、中小の川の舟渡しや橋銭について、外来者に高い料金を請求したことは、大いにありうるだろう。

さて、上記のルートのうち浅瀬を渡った後の山際の道は、近代以降は国道の開発等により忘れ去られた道となっていた。しかし道中記類でその存在が再認識され、近年地元の方々の踏査により確認された。

銚子川を渡り馬越峠から尾鷲の街中へ下りる道も、一様ではない。峠からそのまま街中

へ下りず、わざわざ左手の尾根伝いに天狗倉山へ登っていく巡礼たちが居た。彼らは天狗倉山の山頂から中腹の岩屋堂という宗教施設へと下って行き、そこに安置される弘法大師作と伝えられた観音や、三十三体の観音石仏を詣でたのである。第一番札所的那智山青岸渡寺に至る以前に、関係する仏像・施設をめぐる旅人は少なくなかった。さて、天狗倉山から岩屋堂へ下り、そこから尾鷲の街中に至る道は、道中案内記に雨天時には通行不可と記される峻しい道であった。長い間、麓から岩屋堂へ往き来は出来たものの、天狗倉山頂と岩屋堂とを結ぶ道は埋もれたままであった。やはり道中記類の記載の紹介により、地元の方々の手によって近年この道が発掘されている。

大吹峠から大泊観音を結ぶ道など、同様の事例は他にもある。熊野街道沿いには、埋もれたままの道がまだまだあるはずだ。道中記類の記述が参考となって歴史的な道の発掘が続き、またそれを通して地域社会における道の持つ意味、人々が厳しい地形と自然環境に抗いつつ道を保持してきた歴史に、理解と関心が広がっていくことが期待される。そしてこれは、天から降ってきた「観光資源」などではなく、地域の生活道として存続してきた熊野古道の意味を問い直し、真に地域の文化財として価値付けることに繋がるであろう。

四、道中日記の限界

道中日記は、再三記してきた通り叙述が道中案内記等に強く規定されるなど、史料として利用することの難しいテキストである。加えて、道中日記の作者は地域的にも階層的にも当時の旅人総体のうち限られた人たちであるという点に、留意が必要である。

道中日記の所在地域の分布に偏りがあることは、これまでも関心が払われてきた。事実、現在収集している熊野街道を経由した道中日記 230 点のうちでも関東・東北地方のものが圧倒的で、8 割近くを占める。なかでも現在の福島県域が 53 点、埼玉県が 35 点など突出して多い地域がある。一方で、四国全域で 6 点、九州は 4 点、中国地方は広島のみ 4 点など、極端に少ない。

もちろんこの偏差は、残存状況の実態や江戸時代の作成数の違いをそのまま反映した訳ではない。私たちの調査自体の不十分さに加えて、保存・収蔵機関の充実度にも規定される。西国雄藩の所在地では自治体史類において藩制史が中心に据えられ、道中日記を含む民衆史料は捨象されがちであるなど、地域の歴史意識が影響した面もある。しかしそれらの要因を差し引いても、この収集状況の偏りは、江戸時代における道中日記作成自体の多寡を一定程度反映するものと考えざるを得ない。

詳細は別途公表するつもりであるが、尾鷲組大庄屋文書のなかには 200 冊ほどの算用帳があり、そこには自力で旅を続けられない旅人に村々が施しをした記録がある。宝暦 14 (1764) 年から幕末に至るまでほぼ 100 年の間(冊子の欠年もあるため実質 75 年間)に、7000 件近く 9000 人を越える旅人が、施行を受けた。これらの旅人の出身地を見ると、中国地方や四国地方、そして九州地方からも、それぞれ東北地方とあまり変わらないだけの人数が見られる。熊野街道を経由した旅人全体の出身地域の分布として、道中日記の数値よりもこちらの割合の方が、より実態に近いことと思われる。

畿内近国や東海地域などでは、伊勢参宮や西国巡礼の旅にわざわざ講を組む必要はない。

関東・東北地方から、一生に一度という覚悟で訪れる旅とは自ずから異なる。だが、同じように遠隔地であるにも関わらず、四国・九州地域の数の少なさをどう考えるか。伊勢神宮の御師の旦那場としてはこれらの地域も覆っており、また当該地から伊勢参宮や西国巡礼に赴く習俗も、確実に認められる。道中日記を作成する意識、文化が異なるのか、要因は今後の課題である。

もう一点、道中日記の著者、なかでも西国三十三所巡礼に赴いた人々の経済的階層性を確認しておきたい。施しを受けつつ旅を続ける巡礼との違いは歴然としているが、自力で旅をする一般の旅人のなかでも、裕福な者たちだったと思われる。

地域史料と付き合わせると、道中日記に表れる旅の形式は、随分偏ったものであることが分かる。例えば伊勢国から荷坂峠を越えて海に面する長島の地から木本（現・熊野市）まで、十六里の海路を行く船が盛んに往き来していた。道中案内記に、そしてその影響を受けた道中日記には、「この船乗るべからず」とほとんど常套文句のように表れ、乗船して熊野灘を海路で越えているのは、極めて例外的である。だが、海路の途中にある尾鷲の旅籠屋たちの訴状によれば、天気が良いと旅人達が船に乗っていくため泊まり客が減り、旅籠屋や茶屋、それに草鞋の製造・販売を行う老弱の者たちも困窮する、という（55）。地域の経済に影響を及ぼすほど、船を利用する旅人は多かったのである。

道中日記では例外的な記述を参照すると、船の方が山道を越える苦勞がないだけでなく、早く着き、旅籠屋に泊まる必要もないため経費も高くないように思われる。物乞いをしながらの貧しき巡礼は陸路を行ったに違いないが、道中案内記を手掛かりに道中日記を著すような旅人以外の多くは、天気が荒れない限り船を利用したのではなかろうか。

ではなぜ経済的に余裕があるにも関わらず、わざわざ峻しい山道を越えて行ったのか。波荒き熊野灘で恐怖の思いをすることを避けるためもあっただろうが、道中案内記に「熊野街道八鬼越え」と紹介されるように、この間の峠道を辿ることに象徴的な意味合いが含まれていたとも考えられよう（56）。

伊勢参宮客が年間4、50万人とされるのに対して、熊野参詣者は最大で3万人程度に過ぎない。熊野街道を行く者の数は、大和越えの者の1割程度であった筈である。だが、これまでの収集過程での「感触」では、道中日記も道中案内記も、熊野街道を取り上げたものは、大和越えのものと同じくらいの数が残存しているようだ。賑やかで比較的平坦な道の大和越えに比べて、熊野街道の方が道中案内記をより必要とした。峻しい山道を越え、三十三か所の札所全てを廻る旅は、ある種のマニュアルに沿わない限り難しかった。大和廻りに匹敵するほど熊野越えの道中案内記が出ているのはそのためであろうし、また道中日記自体が次の旅人への道中案内記となったことを考えれば、その割合の意味を理解することができる。道中日記を著す旅人たちは、マニュアル旅文化に最も忠実な（忠実になりうる）階層であった訳である。

西国三十三所の全ての札所を廻るためには、通常ひと月半から2か月ほどを要した。対して大和越えで名所のみを巡る旅は、伊勢から上方を発つまでひと月ほどで足りている。つまり、道中日記を著す階層で、熊野街道を越えて西国巡礼に赴く者たちは、大和越えに比べて、経済的により余裕がなければならなかった。数は必ずしも多くなくとも、京都・大坂の旅籠屋たちが、熊野街道を行く旅人の「先行予約」を目指して道中案内記や引札を出したのも、都会での散財に期待したからであろう。

道中日記は、単独で表される歴史情報は乏しく、また必ずしも正確ではなく、そして道中日記作者の地域・階層による偏りから、当時の旅や旅人の体験・視線をそのままに論じることが危険である。だが他の関連史料や地域史料と付き合わせることで、思いも掛けない史実を浮かび上がらせることができるテキストでもある。そしてこうした活用は、今回事例とした参宮街道、熊野街道沿いのみならず、西国三十三所を抱える畿内近国や金比羅社へ至る道、行き帰りの東海道、中山道沿いまで、広い範囲で可能であろう。道中記は、交通史や地理学、風俗史の分野以外でも、幅広く活用されうるものなのである。

〔注〕

- (1) このリストは、『道中記に描かれた三木里～曾根次郎坂太郎坂』（三重大学、2008年3月）で公表している。
- (2) 代表的なものとして、小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷－関東地方からの場合－」（『人文地理学研究』14、1990年）、同「伊勢参宮道中日記の分析」（『東洋史論』2、1981年）、「旅のモデルルート」（『日本の歴史』75、1987年）等の一連の研究、田中智彦『聖地を巡る人と道』（岩田書院、2004年）、岩鼻通明『出羽三山信仰の圏構造』（岩田書院、2003年）など。
- (3) 一般向けに著されたものに神崎宣武『江戸の旅文化』（岩波書店、2004年）、金森敦子『伊勢詣と江戸の旅』（文春新書、2004年）など。
- (4) 柴桂子『近世おんな旅日記』（吉川弘文館、1997年）など。
- (5) 浜松市博物館第15回特別展図録『庶民の旅』（同館、1996年）、東京都大田区立郷土博物館の特別展図録『弥次さん喜多さん旅をする－旅人100人に聞く江戸時代の旅－』（同館、1997年）、二川宿本陣資料館企画展図録『道中記にみる吉田・二川の名所』（同館、2000年）、朝霞市博物館第9回企画展「旅 道中日記の世界」（同館、2001年）、草津宿街道交流館二〇〇三年春期テーマ展図録『癒しの旅情－西国巡礼の旅』（同館、2003年）など。なかでも『弥次さん喜多さん旅をする』は、出色の成果と言える。
- (6) もちろん、名所遊覧や地域イメージについての分析はこれまでもなされており、博物館の展示や自治体史等で諸国の旅人が該当地域をどのように描いたのかが示されることはあった。しかしまだ部分的な事例紹介に留まっている。
- (7) ただし、伊勢神宮や西国第三十三番札所谷汲山華嚴寺など、参詣の最終目的地で終わっているものもある。
- (8) 前掲「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷－関東地方からの場合－」。
- (9) 道中日記において、東海道の宮（熱田）から桑名へのいわゆる七里の渡しを利用しているものは極めて少なく、ほとんどは名古屋の街並みを見物し、甚目寺や津島大社を参拝し、津島から桑名への船渡しを用いている。
- (10) 道中日記を著す階層に関しては、大和越えと熊野越えの二つのルートに分かつのは、信仰の強弱よりも経済的要因の方が大きいと思われる。
- (11) 西国三十三所巡礼の始点と終点については、田中智彦「西国巡礼の始点と終点」『紀要』16 神戸大学文学部、1989年、同『聖地を巡る人と道』岩田書店、2004年、所収）が詳細な分析を加えている。巡礼たちがこの間に一貫して笠簪・菅笠の装束で旅を続

- けたのか否か、例えば神社参拝時も同様であったのか、確証はない。なお、宝暦4(1754)年2月に京都において、行方不明になった常陸国の豊唾の西国巡礼者についての搜索触が出されており、そのなかに笈摺が目印として挙げられている(『京都町触集成』第三卷一四六五号文書)。
- (12) 寛政元(1789)年に伊万里から訪れた商家の一行は、この鯉を舐めた翌日、美濃加納で「昨日迄ニ三十三所巡礼相仕舞申候祝いニとてしやうじんおち(精進落ち)」に鮎を食べたとする(前山博『伊勢参宮并西国卅三所順礼道中記』、伊万里地方史研究史料第二輯、1995年)。
- (13) 会津若松市史編纂室所蔵、林壮次家文書。
- (14) 文化9(1812)年に常陸国久慈郡から訪れた一行は、熊野街道の三木里の地で、サンマ、タイ、キスの大漁を見るが、「我々精進ゆへ残念なから用ひ不申候」としている(『西国順礼道中記』、大子町史料 別冊九、茨城県久慈郡大子町、1986年)。
- (15) 溝口典次編『伊勢西国道中記』(溝口富美子、1991年)、川名登「庶民の旅」(『海上町史研究』29、1990年)など。
- (16) 北川央「幕末大坂市中巡り一名所旧跡と有名商店」(大阪引札研究会編『大阪の引札・絵びら』、東方出版、1992年)に詳しい。
- (17) 近世の旅のこうした特質については、新城常三氏の大著『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』以来、多くの人によって指摘されている通りである。
- (18) 「尾鷲組大庄屋文書」(尾鷲市中央公民館郷土室架蔵)中の宝暦11(1761)年の「御用留」に記される。
- (19) 「乍恐以書付奉願上候(関東筋百姓之忤共西国順礼夥敷につき)」「蒲生村文書」、慶応大学古文書室蔵、埼玉県立文書館・写真版架蔵)。
- (20) 道中日記に見られる旅人の御所見物については、高橋陽一「多様化する近世の旅一 道中記にみる東北人の上方旅行」(『歴史』97、東北史学会、2001年)の指摘がある。
- (21) 実際には御所で燈籠を掲げ「雑人」に拝見を許すのは7月14、15の両日であった(『京都町触集成』第四卷五一〇号文書)。
- (22) 「伊勢参宮道中記」『平鹿町史料集 第六集』(平鹿町教育委員会、1991年)。
- (23) 「伊勢熊野金ぴら道中記」(『湯津上村誌』、同編さん委員会、1979年)。
- (24) 例えば茨城県立歴史館野口三郎家文書の420号文書と533号文書など。
- (25) 西垣晴次『お伊勢参り』(岩波新書、1983年)。
- (26) 私家版、1972年。
- (27) 死を取り扱う寺・仏教を強く忌避した伊勢神宮では、仏参した当日、時にはその後3日間も参宮を認めないという規定を持っていた(神宮文庫蔵『神宮編年記』天保11年6月17日条)。神社側のこうした原則が、実際にどの程度適用されたのが問題となる。
- (28) ただし、花山院などいくつかの「番外」として定められた寺院と、高野山、善光寺の納経は認められる。
- (29) 前田卓『巡礼の社会学』(ミネルヴァ書房、1971年)。
- (30) 前掲浜松市博物館『庶民の旅』。
- (31) 三重県立熊野古道センターでは、信州埴科郡西条村の夫婦が天保14(1843)年に巡

- 札に赴いた際の笈摺と往来手形、道中日記、そして納札入れを一括して所蔵している。
- (32) 「伊勢西国美知の記」(埼玉県立文書館・林家文書)。
 - (33) 三重県立熊野古道センター所蔵。
 - (34) 「西国道中記」(個人蔵)。
 - (35) 「道中日記」(郡山市歴史資料館蔵)。
 - (36) 『道中記集成』全 47 冊(大空社、1996 年～1998 年)の編集・解題及び今井『江戸の旅風俗』、大空社、1997 年)。
 - (37) 舞鶴市立郷土資料館蔵糸井文庫。
 - (38) 旅行記作家としても知られる貝原益軒が著した「熊野路記」は、実際には熊野を歩いておらず、人からの情報によってまとめられたものである(貝原淑子「江東紀行・熊野路記」『香椎淵』13、福岡女子大学国文学会、1967 年)。
 - (39) 三重県立熊野古道センター所蔵。文政 7(1824)年初版、天保 11(1840)年増修。
 - (40) 川名登「庶民の旅」『海上町史研究』29、1990 年、『西国順礼道中記』、大子町史料別冊 9、1986 年。
 - (41) 以下、道中案内記、引札、定宿帳、講帳等で特に出典注記のないものは、個人的に収集した史料である。
 - (42) こうした旅籠屋手代らの活動については、櫻井邦夫「近世の道中日記にみる手荷物の一時預けと運搬」(『大田区立郷土博物館紀要』9 号、1998 年度)が紹介している。
 - (43) 金井好道『伊勢金比羅参宮日記』(私家版、1978 年)。
 - (44) 前掲今井金吾『江戸の旅風俗』。
 - (45) このうち筑前屋次郎左衛門と餅屋惣左衛門、縫物屋嘉兵衛は六角堂門前の堂之前町に位置するが、この町には他に 18 軒の旅籠屋があった。扇屋庄七、鐙屋太左衛門、備前屋藤五郎は三条大橋東詰にあり、ここにはさらに旅籠屋が密に集まっていた。道中日記の著者たちと特定の宿との結び付きは明らかである。
 - (46) 「伊勢西国名所日記」(甲斐国都留郡玉川村牛田家文書)。この道中日記史料については増田廣實氏の御教示を得た。著者の牛田伝兵衛は、大坂の松屋源助のところで浪華講道中記を購入しているが、旅籠屋 1 泊分の代金に相当する 180 文を支払っており、思いのほか高価で販売されていたことを知る。
 - (47) 伊勢において参宮客は、財力に応じて規模の異なる神楽を選択するが、西国巡礼を行う道中日記の著者たちは、最も規模の大きな(最も高価な)大々神楽をあげている者が目立つ。
 - (48) こうした講は、天保元(1830)年に大坂を講元とし京都・江戸を世話方とする三都講が、安政年間には江戸で東講が起こり、明治 6(1873)年には遠江袋井に栄世講、浜松に文明講、静岡県に一新講が起こるなど、諸種の講が出来た、とされる(大島延次郎『近世交通史論叢(続編)』吉川弘文館、1957 年)。今井金吾氏らもこれを踏襲しているが、旅籠屋の講と住民組織としての伊勢講との混同も見受けられる。
 - (49) 以下、一部既発表の拙稿において報告した部分を含む(「熊野街道『伊勢路』の特質―江戸時代の道中記から―」『熊野古道と世界遺産を考える～第 9 回全国歴史の道会議三重県大会報告書』、『道中記に描かれた馬越峠と尾鷲』、『道中記に描かれた八鬼山越え』、『道中記に描かれた三木里～曾根次郎坂太郎坂』三重大学人文学部、2006～

2008 年)。

(50) 川瀬雅男『西国道中記』。

(51) 『道中記集成』第四四卷。

(52) なお、『佐屋町史 史料編一』には、享和 2(1802)年に京都の三条の旅籠屋と六角堂前の旅籠屋とが宿引きを巡って争論を発生させていた史料を収載している。当初は六角堂前の旅籠屋たちが伊勢・山田の御師の下に立ち入り客引きを行い、三条の者も参入を願ったが許されず六軒で行うと、六角堂前の者たちは神戸で行ったため、佐屋での客引きを行いたいとした。伊勢から参詣路を廻り佐屋まで客引きに出て行ったのである。しかし六角堂前の旅籠屋たちも佐屋で客引きを願い出たため紛争となっているという。だが道中記類からは、必ずしもこの対立の構図は確認できない。六角堂前の筑前屋と三条の扇屋、鐙屋とが共同の道中案内記を出すなどの連携も見られ、また、天明 3(1783)年に出羽国から訪れた旅人の道中日記には、既にこの時期に伊勢山田に六角堂前の扇屋が、外宮の御師・三日市に出入りして荷物の運送等を請け負っていたことが確認できる(『安倍五郎兵衛天明三年伊勢詣道中記』、増田町文化財協会、1998 年)。天明 6(1786)年に内宮の神官・藤波に泊まった者は、共に三条大橋東詰の備前屋藤五郎が宿引をしないため、やはり同じ三条の鐙屋が盛んに勧誘に来たとしており(川瀬雅男『西国道中記』)、同じ三条の旅籠屋内での対立も見られる。

(53) 尾鷲組大庄屋文書(尾鷲市中央公民館架蔵)「御巡見衆御通ニ付木本組境八木山立石より相賀組境間越峠迄案内人へ御尋答書帳」。

(54) 『安倍五郎兵衛天明三年伊勢詣道中記』(増田町文化財協会、1998 年)。

(55) 尾鷲組大庄屋文書「諸達留」(安政四年)。

(56) 巡礼にとって札所を巡ることよりも道中自体に修行としての意味があったとの主張がある。道中の全てに同様のことが言えるかは疑問だが、熊野街道伊勢路、とりわけ八鬼山越えについては、道中案内記の記述も相俟って、こうした要素があったことと思われる。

[補注] 本稿は平成 19 ～ 21 年度科学研究費補助金 基盤研究(c)「江戸時代における参詣街道沿いの地域社会の構造」(課題番号 19520567)による成果の一部である。